

論文特集号

「1F 事故 10 年特集号」の企画にあたって

本企画担当 東北大学 原子炉廃止措置基盤研究センター 山本正弘*

あの時から 10 年が経ちました。2011 年 3 月 11 日というは、日本国内のほとんどの人にとって特別な日だったと思います。お亡くなりになられた方々には心から哀悼の意をささげます。また、今に至っても避難生活を余儀なくされておられる方々には、永く続くご苦勞を考えると言葉にならないものがあります。10 年という歳月の間に大きく変わってきたことはたくさんあります。日々の暮らしの中で、人々の頭の中から、東日本大震災や福島第一原子力発電所(1F)の事故のことが、過去のこととして忘れがちになることも多いと思います。

しかしながら、未だに目の前の課題として関わっている人達も多くいます。腐食防食学会には、1F 事故以前より原子力施設の腐食の課題に取り組んできたメンバーが多数在籍し、それらのメンバーはこの 10 年間に何らかの形で 1F の事故に関わる業務をしてきたはずで、2013 年の秋に福島市で実施した『第 60 回材料と環境討論会』において、1F の腐食対策に関わる特別セッションを開催しました。その当時は、多くの人にまだ事故直後のイメージが残っていたので、非常に活発な議論ができたと思います。この会以降、毎年秋の討論会において 1F 特別セッションを継続して行ってきました。その根底には、1F の廃炉という課題を All-JAPAN で考えたいという思いがあり、また、1F の腐食課題を解決するためには、原子力関連のメンバーの知恵だけでは解決できない複雑な事象が多く、化学プラントの腐食・大気腐食・微生物腐食などの他分野の知識や、腐食の基礎に関わる知見を有する研究者・技術者を集めた英知を結集しないと進まないと考えたからです。この考えはそれなりに賛同を得てきたと思っています。

2021 年 5 月の『材料と環境 2021』では、事故後 10 年という節目にあたっての課題セッションを開催しました。コロナ渦の影響もありオンラインでの開催でしたが、70 名以上の聴講者にご参加いただき、その中で網羅的な議論ができたと思います。この課題セッションの企画委員会の会議の中で、これまでの経験を『今後の 10 年を担っていく若い研究者・技術者に引き継いでいくために何をしたらよいのか』という議論が興りました。議論の中で、これまで実施してきたことを個々人の『記憶』に留めておくだけでは意味がなく、これから新たに研究開発をする若い人たちに『記録』として残しておくことが重要であると

1F 事故 10 年特集号 企画委員会
*委員長：山本正弘(元腐食防食学会長)

の結論に到り、本特集号の編纂につながりました。

本特集号の構成にあたっては、これ1冊を読めば1Fの腐食対策に関わる10年間の研究開発のアウトラインが見えることを第一義に考えました。それぞれの研究内容は英文誌や他の国内学会誌の論文になっていたりするのですが、それらを引用する形で解説及び論文を執筆していただいていますので、大まかな内容を本特集号でとらえていただき、詳細な内容については別途引用論文を参照していただくことが可能になるはずです。また、執筆に際しては、実際に研究開発を進めてきた雰囲気が伝わる様にも心掛けていただいたつもりです。研究開発を行ってきた課題については、1Fの現場の状況が変わることにより、当初の目的が無くなった案件もあります。しかしながら、その間に本当に多くの腐食研究者・技術者が関わってこられたことは事実であり、そのことを是非紙面に残していきたいと考えました。

本特集号を学術的な読み物としてではなく、物語的な視点で読んでいただくのも良いと思っています。そして40年といわれる1Fの廃炉工程の中で、20、30、40年特集号がこれからも編纂されるだろうこと、その第1巻として本誌が後に残されることを、企画したメンバー一同、祈念しております。